



①



②



③



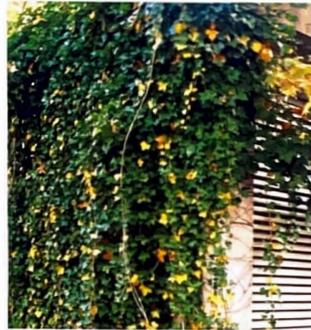
⑩



⑪



⑫



④



⑤



⑥



⑬



⑭



⑮



⑦



⑧



⑨



⑯



⑰



⑱

RELISH YOUR LIFE!!



- ① Something wonderful. It's your smile!
- ③コスモス in 寺家
- ⑤おもち焼きの合いまに。軍手がいい感じ。ポーズもいい感じ (学祭)
- ⑦ロールキャベツ屋さん。うまかった。(学祭)
- ⑨あわてて撮らせてもらった着物姿。ありがとう。ありがとう。
- ⑩おでんを売ってた?人。(学祭)
- ⑫これも学祭です。この時は夕焼けがきれいだった。
- ⑬「え、何?」
- ⑭焼きそばをやく手慣れた手つき。
- ⑮みんなさりげなくポーズをつけてくれて、ありがとう。
- ⑯横顔がりりしいのって良いよね。
- ⑱鳥取砂丘のラクダ。撮エイ料500円!! 勝手にとったら怒られた。

いい笑顔たくさんありました。快くとらせてくれた皆さん、本当にどうもありがとうございます。感謝 (撮影・文 福田 祥世)



目次

飛翔54号概要

この54号では全体の構成を分かりやすくするために、前半部分に特集記事を集中させ「パート1」後半部分に定番である研究室紹介・エッセイ・事務連絡を集め「パート2」とし、二つのパートの間の中グラビアを設けメリハリをつけた。(中グラビアは同時にパート2部の目次も担当)

研究室紹介は総力を挙げ8コース。エッセイ等はすべて1頁型にしてまとめ、表紙・グラビアは前号と同じく写真部の方に依頼。K棟大図解まで完備。

飛翔54号、堪能していただければ幸いです。

<教育特集>

特集として教育を題材にした。タイムリーなものであるし大学という教育機関に属する一学生として興味深いものだったからだ。人間は生まれいであら死に行くまでに情報を蓄積していく。遺伝情報以外は、すべて外部から入力される情報であり、

発達段階においては、教育というものが重要な情報提供の場である。今の自分自身の根幹を成すものは「家庭教育・学校教育・社会教育」など教育というものの中で形作られたものである。今号では編集委員自身通ってきた教育・所属している教育とい

うものを大学生であるという立場から探ってみた。

<教育特集 第一部>

その青年は悩んでいた。「どうして僕はここにいるのだろう。」普通の中学・高校・そして大学。選んできたのか、選ばされてきたのか、疑問すら感じることもないままに歩んできた道。いや、

パート1

巻頭言

「授業中にノートをとるべからず」 1

生和 秀敏 (総合科学部学部長)

特集 ○教育特集 2

第一部・青年Z・ 3

—どうして僕はここにいるんだろう—

第二部・大学に要求するもの・

第三部・座談会・ 10

—大学は勉強するところですか?—

○総科ホームページ紹介 17

○特集後記 21

疑問を感じながらも選択してきたのだろうか……。Zは何を感じたんだろう。何を思うのだろうか。これからどうして行くのだろうか。今日的教育を受けてきた素朴な青年がかたる、高校から大学までのある「ありきたりなストーリー」ここにお届けいたします。

<教育特集 第二部>

当たり前前事ではあるが、大学に求めるものは学生一人一人が違うだろう。そして、一人だけの小さな不満と判っているから、自分一人の愚痴へと押さえ込んでしまう。しかし、仮にそれを出発点としたらどうなるのか。個人の小さな不満をもとに、それに応える「理想の教育」を作り上げてみた。

<教育特集 第三部>

先日新聞に載っていた対談の場で、ある小説家が現代のことを「何となくわかった気になってしまう社会」と表現していた。それにほだされて、という訳でもないが、飛翔でもある面馬鹿のような議題でディベートを行ってみた。真剣に読んでくれずともいい。なに馬鹿なことといってやがる、というあら探しでも良いので、これを契機に何か考えて欲しい。そう思って特集を組んだ。旋破りの二元論、「大学は勉強をする所ですか?」

<ホームページ紹介>

最近みんな一情報化社会、情報化社会なんて言ってるけどサー。やっぱインターネットよね。広大生って一、みんな自由にパソコン使えるから一。やっぱ利用できるものは利用しとかなないと損じゃない?それに今時の人間なら一、インターネットぐらいいは活用できないとね一……。

<K棟大図解>

普段は何気なく使っているK

パート2

中グラビア (パート2 目次) 22

研究室紹介 (人文・地文・社会学・外语) 23

(数理・物生・自然環・生体)

寄稿・依頼・エッセイ 31

(よりよい授業を目指して)

(総科OBからの声)

(エッセイ)

人事異動・新任教官紹介 37

K棟大図解 39

読者からの声 42

飛翔伝言板 43

棟ですがちょっと注意を払ってみると様々な面が見えてきます。例えばごみ箱やトイレなど。そんなことを色々書いてみました。とにかく色々盛りだくさんです。新1年生の人もこれからの4年間の参考にでもして下さい。2年次以上の人や教官も新たな視点でK棟を見てみてはいかがでしょうか。地域の方も広大の内部を想像して楽しんで下さい。新たなK棟があなた達を待っています。

「授業中にノートをとるべからず」

生 和 秀 敏 (総合科学部学部長)

最近の授業で気になることがある。それは学生諸君が実にこまめにノートをとるということだ。「教師が授業を始めたら喋るのはやめろ」「はじめから眠るようなら教室に帰るな」。この二つは授業を受ける上での基本的なルールである。私はそれに、「授業中にはノートをとるな」という項目をぜひ付け加えたいと思う。

口の悪い同僚によれば、「私語と死語は最近の若者の特徴」なのだそうだ。どうでもいいことは実によく喋るが(私語)、自分の意見をきちんと話す段になると途端に緘黙を決め込む(死語)。もっともこれは若者に限ったことではない。大人だって似たりよったりで、所詮、匿名性の中で生活している大衆というものはそんなものかも知れない。大学生の大衆化現象に伴った行動的特徴であれば、「黙れ、静かにしろ」というより、個の確立を促す努力をすべきなのかも知れない。しかし、外国の大学と較べて、何とも物足りないことは事実だ。

学生が授業で眠ることについては、今も昔も変わらない。「面白くない授業を聞かされている学生にとって、眠るのはせめてもの自己防衛的行動」と考えられる。教師は魅力的な授業を行うべきであり、多くの学生が眠っている授業担当者は、明らかに教師としては失格である。授業方法や内容について抜本的に考え直す必要がある。でも、授業の最初から眠るというのは、以前はあまり見受けなかった現象である。今の授業にはサボル自由度がないのか、夜のアルバイトのせいなのか、教室以外に時間つぶしをする場所がないためなのか。「だって行く所がないだもん」といわれれば、西条キャンパス周辺的生活環境の貧困さの反映のようでもあり、実のところあまり叱る気になれない。



しかし、めったやたらノートをとる学生には我慢がならない。ノートとは日本語でいうならば備忘録。あくまで忘れた時のための覚えである。メモ程度に要点をノートすることは一向に構わないが、ノートをとることに専念することは、教師が期待している授業参加の方法ではない。何よりもまず、耳目をそばだてて、話していることの本質をしっかりと理解してほしい。内容が分かりにくかったら、その場で質問してほしい。それなのに、教師の顔もロクに見えないで、ひたすら黒板の字をノートに書き写す作業にだけ没頭するなど、冬眠前のリスのエサ集めならいざしらず、とても大学生のやることではない。

その意味もあって、私は学生がノートをとりにくいように、それなりの工夫をしている。板書の仕方には規則性がなく、当日のテーマ以外の字は乱雑で、黒板を書き写すことなど、事実上不可能である。記号や矢印ばかりが多く、仮にうまく写したとしても、そんなノートなど、試験の前にいくら判読しようとしても分かるわけではない。授業のノートとは、授業が済んだ後、メモを頼りに授業の様子を鮮やかに再現し、紹介された文献を自分で読み、自分で考えながら作り上げるものである。「ノートなど、授業中にとるものではない」。



特集

- 教育特集・青年Z
 - ・理想の教育
 - ・ディベート
- 総科ホームページ紹介

「教育特集」

1997年、教育改革が行政六大改革の一つに数えられ、政府主導型の改革がスタートした。「心の教育」「均等から個性化」「高等教育の質・量の向上」が掲げられ、教育システムの整備が進んでいる。

さて、ではそのシステムの中の生徒はどうなのであろうか?小・中・高と教育を受けてきた学生。そして今大学に在籍している学生。やがては社会へと出ていくであろう学生。

今号の教育特集は学生に焦点を当てながら、現在の教育システムを様々な角度から試し切りしてみた。

「総科ホームページ紹介」

総合科学部ホームページ開設の報を受け、編集委員がさっそく調査。

超パソコン初心者に捧げます。



青年 Z

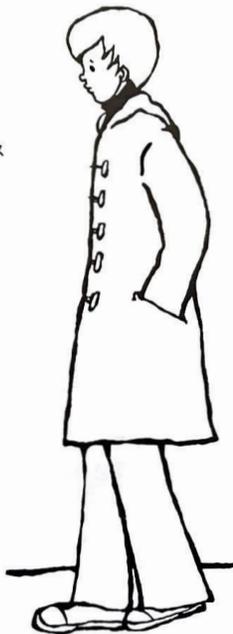
春。桜の木々がざわめき、薄紅の雪を舞い散らせる頃。

僕はある疑問を持ちながらここに立っていた。

大学入学の日から大きくなり続けている疑問を抱きながら……。



- ・妹と両親との
四人家族。
- ・高校時代にはプラス
バンド部に所属。
- ・某公立高校卒。
現役で現大学に
合格、入学。
- ・現在一人暮らし。



青年 Z 性別 男
1月25日生

Zは困惑していた。

「僕は何を思ってここに来たのだろうか？」

大学に合格したときは、大学生になるのだという自信や将来への希望を持っていた。しかし、実際に大学のキャンパスに立ったとき、これから何をしていくのかという疑問を抱いたのだ。友達になったW君はこの学部のG教授を慕ってこの大学にきて、その手伝いをして行きたいと言っていた。Y先輩は留学するつもりで頑張っていると言っていた。目的を持つ知人達の言葉はどうしても彼に焦りや疑問、不安を生じさせた。

— どうして僕はここにいるのだろうか？ —

確かはじめでこの大学を選んだのは高2の頃だった。先生が進路調査用紙を配って、僕は適当に書いて提出した。そしたら先生にいろいろ言われたんだ。偏差値のことや受験科目のこと、面接のこと……。

夏

照りつける太陽と蟬の声。

季節の移り変わりは、時の流れを実感させた。

しばらくすると僕は大学での新しい生活に慣れるのに忙しくなり、その疑問は心の底に沈んでいった。新しい友人達と遊ぶのは楽しかったし、両親に干渉されない一人暮らしは快適だった。

再びその疑問を感じたのは夏休み前だった。前期試験の時だ。僕は単位を拾うために、ノートをコピーさせてもらったり試験のヤマを張ったりしていた。僕はこんなことをしに大学に来たのか……？遊ぶのは楽しい。でも何のためにここにいるんだ？



— どうして僕はここにいるんだろう？ —

「自分の希望進路を第一志望から書いていけ。慎重に決めろよ。」という先生は進路希望調査用紙を配った。みんななりあえず自分なりに考えているようで、シャーペンの音が教室に響いていた。僕は自分のやりたいことがわからず、学部決定ができなかった。どうしようかと思ったけど、先生にいろいろいわれるのもいやだったから自分の偏差値に併せて書いたものを提出したんだ。

その後も僕は不安だった。書いた希望がその場しのぎだったことが分かっていたから。僕はみんながどんなふうに進路を決めたのか気になってしかたなかった。そして、友人のXに聞いたんだ。「Xはなんて書いた？」彼は笑って「俺は～大にしたよ。」僕は驚いて問い返した。「でも、Xならもっといいとこ狙えるだろ？」「うん。でも俺は勉強したくないし遊ぶために行くんだから何処でもいいんだ。～大なら遊べそうだから。」……僕は何か違うと思ったけど、彼は楽しそうだし迷ってもいなかったからちよつとうらやましかった。でも僕にはそんなことはできなかった。やりたいことがある訳じゃないけど、それは違うと思ったから……。

それから先生はなんども調査用紙を配り、僕はその度に不安と焦りを感じた。そして結局自分の偏差値に合わせて、当たり障りのないところを書いて提出していた。そのうちそれが自分の希望のように思いはじめていった。

期末試験も終わり、夏休みになって地元の友達と遊んでいるときも僕の心は晴れなかった。結局僕は自分が何をやりたいのか分かってないんだーそう思うとまわりの友人達に置いて行かれたような気分だった。焦りは常に僕の中にあった。長い夏休みもただ漫然と過ごしていた。

日米の大学観の違い
「学力主義」と「教育主義」

日本の大学は「学力」がないと入れない。よつて、日本の大学でもっとも評価されるのは入学先とその結果から来る就職先である。しかし、アメリカの大学入試はより多角的な面で選考され、最も重要とされるのは大学生生活の過程から来る卒業である。よつて、アメリカの大学では卒業者は入学者の六割でしかない。これはアメリカの大学は入学者の六割のように「学力」のみを問うのではなく、多角的に学生の人間性を捉えるからである。このことからアメリカの大学は一人の人間を「教育」する事が目的だと言える。また高校在学中でも大学の単位を取得できることなどからもあまりアメリカの大学は入学にこだわっていないといえる。

文責 青松伴晃



秋 秋になり、後期が始まると大学生活への慣れと夏休み中の不規則な生活のせいで、だらだらとした生活をした。

— どうして僕はここにいるんだろう？ —
ふと面接試験のことを思い出した。「どうして君はこの大学を志望したんですか？」面接官のその質問は予想していたものだった。僕はあらかじめ用意していた答を口にした。「はい、～に興味があって研究しようと思いました。この大学を選んだのは校風と理念に惹かれたからです。」僕は本当はこの大学の理念なんてどうでも良かった。ただ自分の偏差値に合わせたからここになっただけだ。あの面接の時僕は、自分の思っていることを言っていたのではなく、当たり障りのない返答をそれらしく言っていたに過ぎない。研究したいことが、興味のあることが本当にあるなら、こんなに悩むことはなかっただろう。



こんなことで悩んでいるのは僕だけなんだろうか？まわりの人は自分が何をやりたいのかわかっているのだろうか？

僕は気分転換にバイトを始めた。そこで同じ学部の先輩とであった。彼と親しくなるにつれて彼に僕の悩みを聞いて欲しくなった。そして不意に彼に大学生活に対する疑問を投げかけてみた。「誰でも一度は考えることだらけ程度の差はあるかも知れないけどな。あまり気にするなよ。そのうち解決するんじゃないか」その日僕は寝る前に、もう一度彼の言葉を思い出していた。

「誰でも考えること……か」
「誰でも」という言葉はにんだか奇妙な苛立ちと安心感を感じた。「みんなと同じ……か」何気なくつぶやきが漏れた。

「じゃあ、どうしたらいいんだ。やりたいことを見つけたらいいんだろうか？ そうなったら解決と言えるんだろうか？」みんなは何を目指しているんだろう。「いい会社？ いい就職？ ちがう!! それじゃ大学を選んだときのように、会社についてから同じ疑問にぶつかってしまいそうだ。だいたい、いい会社ってなんだろう、給料の高い所？ それとも安定しているところ？」答でそうにない問いかけが頭の中で渦巻いている。僕は今日も眠れそうにないと思った。

— とりあえず読書 —
中学校の同窓会に出席したときのことである。懐かしい顔に出会って思ったことは、言葉は悪いが「落ちたもんだな。」であった。悲しくさえた。先のことなど考えていない様子だった。
「生き方」というものを考えたことがあるだろうか？ 私は「生き方」について考えることは、それこそが本当の教育なのではないかとさえ思うことがある。「生き方」というものを考えれば、今何をすべきかが分かってくるはずだ。一度しかない自分の人生。何も考えずに過ごすのはあまりに意味のないことだと思う。私は大学に入学したとき、「本を呼んで知識を得よう。いろんなことに挑戦して経験を得よう。」と、かく、四年間を無駄にしてはいけな。」と思っていた。そして中学校の同窓会に出席したとき、それは決意へと変わった。今、経験はともかくとして、本は読んでいる。決してヒマ潰しに読んでいるわけではない。本は人生への投資だと考えているから読んでいるのだ。本を読む中で素晴らしい言葉にも出会った。「活字」というものは、他人の人生を決定する力さえ持っている。「勉強とは目標と現在の状態との差を埋めるものだ」「学ぶことによつてオレの人生は変わった。」他にもまだまだあるが、自分のやっていることは間違っていないと思わせてくれる。私は大学という場所は、そこで行われる授業によつてではなくてそこでの出会いによつて影響を受け、人間として成長できる場所だと考えている。素晴らしい本、素晴らしい経験かも知れない。ここでいう「素晴らしい」とは「人生を変えるような」とも捉えてもらってもいい。そんな人生が変わるような出会いを求めつつ、とりあえず、本だけは読んでおこうと思ひ、日々を過ごしているのである。
(編集委員談)

この後 Z は旅行好きのある先輩に出会う。彼は海外への旅行を計画していた。語学が達者で、特に英語はすく流暢であった。そして、「俺は今中国に行きたい。だから中国語を独学している。旅行なんて大学時代にしかできそうにないから……。」という言葉を受け取る。

独学……。彼の行動力に僕は驚いた。大学生活は自分で切り開いていくものなんだ……。自分のやりたいことをやればいんだ。留学、ボランティア、旅行、勉強……。したいことは無限にある。それをこれから自分で見つけなければいんだ。僕はやっと自分の場所を見つけた気がした。これから僕の大学生活が始まる。



< Z の背景 >

— Z の終わりに — 日本的教育の中で、大学に流れついた Z。彼は「独学」というキーワードを手に頑張っているのか？ それとも、今後再び疑問を感じ立ち止まってしまうのであろうか……。

今、日本において具体的な目標を持たずに、「なんとなく」で上の学校を目指す生徒が増えているのではないだろうか？

戦後の「追いつけ追い越せ」ムードが弱まり、将来へのある種のビジョンが失われた。そして、生徒達は「とりあえず」や「なんとなく」で高学歴を目指す。将来の目標を持たぬまま、とりあえずいい学校を目指していく。次の学校へはいることが「将来」のための手段でなく目標と化している。いい小学校に入って次はいい中学、いい高校というわけだ。

いいかえれば「学力の評価・成績の比較」によって生徒のアイデンティティの補強がなされているとも言えるだろう。成績（学歴）以外に評価されるモノがないのだ。学歴・学力が生徒自身の物差しになっているのだ。（この物差しは社会が生徒を見る物差しでもあり、生徒が社会を見る物差しでもあるのだ。）

現在の教育制度の中にはこういった「学歴偏重」ならぬ「学力評価依存」の生徒の存在があるのではないだろうか。

一方、大学は自由な場である。社会的にも自由であることが認められているともいえるだろう。「いい企業に就職を狙う」も「旅にはまる」も「学問する」も言ってみれば自由である。大学では、この自由だからこそ起こり得る様々な出会いの中で、多様な物差しに触れることが可能だろう。また、多様な物差しに触れられるからこそ自由な場を満喫できるのだ。大学において、この惰性で流される学歴主義の中にある学生が、立ち止まり、あたりを見回せる。そういう場が存在する意味合いは非常に大きいと思う。

個性化が叫ばれる昨今、初等中等教育の選択授業の増加、入試制度の多様化が進められている。表面的には個人を尊重し、自由度を与えているのかも知れない。しかし、それは多様な物差しを伴わない選択肢を増やしているだけである。だから選択授業を選ぶ際にも「学歴という物差し」にとらわれて、入試に有利な科目で決定してしまうのだ。将来的な進路を見据えての選択や個人の嗜好による決定はなされにくい。

大学には自由である場と多様な物差しがある。だからこそ個人が自由を感じ個性を発揮し、自主性を発揮できるのだ。Z の背景と Z の苦悩に何を見るかは様々だろうが（何も見ない人もいるかも知れないが）大学の片隅で「ひとの流れ」からはぐれて悩める自由、そんな自由もあるのだ……。

以上、大学において「流される自由」「流れに逆らう自由」をもろともに感じていたいと願う者のつぶやきである。

Z の終わりに……完。

(文責 飛翔編集委員)

